

民俗芸能を支える技①

縁の下の力持ち

獅子頭、横笛製作

長谷川照昭さん（山武市）



県指定の仁組獅子舞、西ノ下の獅子舞、北之幸谷の獅子舞、岩沼の獅子舞をはじめ、東総地方には2人立ちの獅子舞が多く伝承されています。神事としての格調高い舞に加えて、梯子上で行う曲芸や芝居仕立ての演目を伴っているところに特色があります。また獅子頭は、下歯が上歯の中に入り、穏やかな、しかし使い方によって恐ろしい表情にもなる独特な顔をしています。現在、この上総獅子頭の唯一の製作者が長谷川照昭さんです。大正時代に絶えた制作を、ひとりで研究・工夫して復活させたのだそうです。地元の桐を角材にし、雨ざらしでアクリルを抜いて使います。粗彫り・仕上げ彫りののち、寒冷紗をかけ、漆塗りの工程を40程重ねて仕上げます。今までに100くらいの頭を彫ったほか、古い獅子頭の修理も行ってきました。

また、長谷川さんは「蘭情」の銘で横笛も作ります。昔ながらの祭り笛のほか、西洋音階に合わせて調律した笛を作ることから、近年は全国的に名を知られるようになりました。一唄幸弘氏など現代音楽の演奏家や鼓童という日本を代表する和太鼓集団を顧客としています。笛作りも師匠についたことはなく、すべて独学で、だからこそ新しい挑戦が続けられるのだと言います。

全国的に有名になっても、一方で獅子舞の復活の相談にのったり、こどもたちを対象とする篠笛教室の講師をつとめたりと、地元の芸能への目配りを忘れません。伝統の継承と研究や工夫が相反するものではないこと、むしろ伝統に新たな命を吹き込みながら継承していくためには、たゆまぬ研究や努力が不可欠だということを、長谷川さんから改めて教えられ、考えさせられました。

伝承団体の紹介③

ガンバッテます！

浅間神社の神楽

稻毛浅間神社神楽連（千葉市）



海中に一の鳥居があった稻毛浅間神社。今は埋めたてられた浜に団地が立ち並び、海を望むことはできません。周囲の松林だけが、海水浴や潮干狩りのお客で賑わった稻毛の浜の様子を、今に伝えています。ここで伝統の神楽を伝えている神楽連の方々を、11月23日の新嘗祭にお訪ねしました。安産と子育ての神様として知られる稻毛浅間神社だけに、七五三参りの家族連れが引きも切らず、神楽殿の前にも多くの人が集まっていました。稻毛1・2・3・5丁目と稻丘町が氏子の区域で、神楽連のメンバー13名は、みな氏子の方々です。それぞれのお宅では夏は農業、冬は海苔養殖やあさり・はまぐり漁などに携わり、半農半漁の営みだったそうですが、メンバーの世代では大半が勤めに出たため、帰宅後の夜に練習に集まり、そして年6回の奉納を行ってきました。子供の頃、おじいさんが舞う神楽を見ながら、自分もおとなになつたらやりたいと思っていたという方、氏子青年会で神社の行事を手伝ううちに参加するようになったという方・・・。12座の神楽は伝えられてきたまま、全く変更を加えずに演じているそうです。変貌する地域の中に変わらずに伝えられてきたもの、人のつながりがあることに、改めて気づかされます。一方、今後の伝承を考えると、最も若い方で52歳、最年長の方は75歳というメンバー構成は不安材料もあります。「これからは昔からの氏子地域にこだわらず、新住民の方からも希望者があれば、ぜひ参加してもらいたい」とのことです。転換期を迎えている稻毛浅間神社神楽連の今後の発展を祈念し、心からエールを送りたいと思います。

編集あとがき

昨年度に引き続き、財団法人日本教育公務員弘済会千葉支部から奨励金をいただき、会報を発行します。県民連の会報は、年2回発行の予定です。原稿・取材依頼等をお寄せください。



千葉県無形民俗文化財連絡協議会事務局
(千葉県教育庁教育振興部文化財課内)

〒260-8662千葉県千葉市中央区市場町1-1
TEL:043-223-4082

けんみんれん会報「千葉の無形民俗文化財」
No.3発行:2008年12月22日